

研究のライフサイクル



高 柳 俊 夫

2025 年度中国四国支部長を仰せつかっています高柳です。支部の皆様のご意見を伺いながら務めていきたいと思ひます。小職は大学に勤務しており、大学・大学院での教育研究に携わるようになって早いもので 30 年が経過しました。「10 年ひと昔」とよく言われますが、これまでの期間、分析化学研究にかかわれてきたことに感謝したいと思ひます。まだまだやりたいこと、やるべきことがありますので、何事にも臆することなく取り組んでいきたいと思ひます。

さて、測ることを主眼とする分析化学の領域で、研究の近くに長くいると数多くのトピックに触れる機会があり、時代の流れを感じます。新しい測定機器、計測手法や測定対象物質が提案され、その有用性が認められると様々な適用例やアプリケーションが開発されます。普遍的に使われるようになると一般化されて、研究開発からは離れていきます。これが研究のライフサイクルでしょうか。研究や開発の過程で、生み出す貢献もあれば育てる貢献もありますから、トピック的な研究開発に何かしらの役割を果たせられれば研究者としてとても幸せです。とはいうものの、ある方から釘をさされたことがあります。流行っているからとそれに乗るのはただ流されているだけで、あなたが貢献できているわけではない。まずは自身のスタイルを作りなさいと。課題にデッドロックがあり、そこに適した解決策を持ち込める人が真に貢献できる人なのだと。自身の持てるものと必要とされるキーテクノロジーとのマッチングはなかなか難しく、成功させるには感度高くアンテナを巡らせておく準備が必要ですが…。一方で、自分のスタイルと思えるものができる、物事を進める上で「型にはめよう」と保守的になってしまいますから、良い結果につなげるための試行錯誤は欠かせません。安易に妥協してしまう優柔不断な判断にならないよう心がけたいものです。

デッドロックのことを書きましたが、時代や社会情勢には変化がありますから、意外と完成している（ようにみえる）ものに解決が望まれる重要なポイントが潜んでいます。そのような事象に対処できれば、また新しいステージへと進み、再び研究開発のライフサイクルを回すことができます。21 世紀になる頃にグリーンケミストリーが出てきて、落ち着いたかなと思っていたらまた近年、SDGs という名前で出ています。色々な事情があつてのことと思ひます。ファッションの世界でも、女性のスカートが短くなったり長くなったりしますし、かつて流行した厚底サンダルやルーズソックスが、世代交代くらいのタイミングでまた流行しているようです。分析化学の世界もステージを変えながら、サステナブルに研究の世代を重ねていくのかなと思ひます。

〔TAKAYANAGI Toshio, 徳島大学大学院社会産業理工学研究部, 中国四国支部長〕